

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目 連体修飾用法における日本語の形容詞・連体詞「Xい」と「Xな」の使い分け  
一大規模コーパスに基づく計量的研究一

氏 名 劉 善鈺

## 論 文 内 容 の 要 旨

本研究では、語幹を共有する6組の形容詞・連体詞「Xい」と「Xな」を対象として、日本語大規模コーパスより得られた連体修飾の実例（総計14,188例）をもとに、イ形とナ形の使用傾向を多変量的に分析し、連体修飾用法における「Xい」と「Xな」の使い分けについて考察を行った。研究対象の6組は、[オオキい・オオキな] [チイさい・チイサな] [オカしい・オカシな] [アタタかい・アタタカな] [コマかい・コマカな] [ヤワラかい・ヤワラカな]である。なお、ここでのカタカナ表記は、それぞれの語幹のレンマを示しており、実際には形態上・表記上のバリエーションを含めて対象としている。

調査に利用したコーパスは、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に収録されているサブコーパスの『Yahoo!知恵袋』、『国会会議録』、『雑誌』、『新聞』及び、『新潮文庫の100冊』、『BTSJによる日本語話し言葉コーパス』、『名大会話コーパス』、『太陽コーパス』、『近代女性雑誌コーパス』の、計9種である。

「Xい」と「Xな」は異なる文法的カテゴリーに分類され（イ形容詞 vs. ナ形容詞または連体詞）、用法も異なる（「Xい」は全て連体用法と述語用法の両方を持つが、「Xな」には述語用法を持たないものもある）が、両者には後続する名詞を修飾する機能を持つという共通性がある。しかしながら両者にはどちらも使用可能な場合と、片方のみが使用可能な場合とがある。連体修飾用法における「Xい」と「Xな」の選択がどのようにしてなされているのかという問いは、一見単純そうで種々の要因の絡んだ複雑な問題であると考えられる。

「Xい」と「Xな」の使い分けに関する先行研究は少なく、解明されていない点が多い。例えば、①「大きい・大きな」の使い分けの記述は先行研究によって様々である。②「大きい」、「大きな」、「小さい」、「小さな」の4語以外の語を取り上げた研究は殆どない。③先行研究は日本語母語話者の内省による分析か、書き言葉のみに関するものであり、話し言葉に関するものがない。④「Xい」と「Xな」の使い分けを通時的な観点から取り扱ったものがない。

そこで、本研究では、対象語を増やし、大規模で多種類の書き言葉コーパス及び話し言葉コーパス

に基づき、まず現代語における「Xい」と「Xな」の連体修飾用法について調査を行い、両者の使い分けのモデルを提案し、次に近代語における「Xい」と「Xな」の通時的な使用変化を考察し、現代語に見られる「い形」と「な形」の使用の相違は、言語の歴史的な習慣と密接に関わり、その歴史的な規範に影響されている可能性がある、という結論を導き出した。

本論文は8章からなり、各章の内容は以下の通りである。

第1章は序章として、本研究の位置づけ、研究目的と研究課題、研究方法と研究対象、本研究の構成を紹介する。

第2章では、まず形容詞と連体修飾用法全般に関する先行研究を概観する。その後、本研究で扱う「Xい」と「Xな」の現代日本語における使い分けについて共時的観点から考察した主な先行研究について説明し、その問題点を指摘する。

第3章では本研究で使用するコーパスの詳細と、コーパスから「Xい」と「Xな」の実例を抽出する手法を述べ、本研究のデータベースの構築作業を説明する。

第4章では、連体修飾用法における「Xい」と「Xな」の使い分けは、文内要素の形態統語的性質によるのか、「Xい」と「Xな」の意味的差異によるのか、という2つの問いを中心に、現代小説のコーパスを用いて検証する。

第5章では、連体修飾用法における「Xい」と「Xな」の使い分けと、社会言語学的なレジスターの関係に注目し、種々のレジスターの現代語コーパスから得たデータに基づいて共時的観点から先行研究で指摘されている「Xい」と「Xな」の使い分けを検証する。

第6章では、第4章と第5章の分析結果をまとめ、連体修飾用法における「Xい」と「Xな」の現代日本語における使い分けの基準を提示する。

第7章では、連体修飾用法における「Xい」と「Xな」の使い分けは、言語の歴史的変化にどのように影響されているのかに関して、近代語コーパスを利用し、通時的観点から「Xい」と「Xな」の歴史的な使用変化を考察する。

第4章から第7章までの4章が本論文の中心的な部分である。

最後に、第8章は終章として、本研究の主張をまとめ、日本語学への示唆、及び今後の課題について述べる。

本研究の計量的分析によって明らかになった「い形」と「な形」の使い分けの基準は以下の通りである。

(1) <全体的に見られる使い分けの基準>

- ① 文中での機能：「い形」と「な形」は、その用法が、連体修飾のみであるのか述語用法を兼ねているのかにより使い分けられ、述語用法を兼ねている場合には「い形」が多く用いられる。例えば、「大きい家」「大きな家」はどちらも多く使われているが、「窓が（大きい／大きな）家」のように、「大きい／大きな」が述語用法を兼務している場合に、「大きい」を使って「窓が大きい家」とすることが多い。

- ② レジスター変異：「い形」と「な形」はレジスターによって使い分けられ、改まり度の高いレジスターでは「な形」が「い形」より好まれ、改まり度の低いレジスターでは「い形」の方が好まれる。例えば、「小さい子供」と「小さな子供」とは両方可能であるが、実際には「小さい子供」はより日常的な発話に多く用いられる。
- ③ 被修飾名詞の性質：「Xい」と「Xな」が形式名詞に係る場合は「い形」が多く使われている。例えば、「大きいほう」、「小さいため」、「おかしいこと」、「温かいうち」、「細かいほど」、「やわらかいわりに」の中の「い形」は「な形」に置き換えることが難しい。
- ④ 「主語付き」修飾節の主語助詞：「主語付き」連体修飾節をなす場合、主語助詞に「が」が使われる場合は「い形」が選択されやすく、主語助詞に「の」が使われる場合は「な形」が接続しやすい。例えば、「目が大きい少女」と「目の大きな少女」のように、「～がXい+名詞」「～のXな+名詞」の組み合わせは、「～のXい+名詞」「～がXな+名詞」の逆の組み合わせより好まれる。
- ⑤ 被修飾名詞の語種：被修飾名詞が和語の場合は「い形」との結び付きが強く、被修飾名詞が漢語の場合は「な形」との結び付きが強い。例えば、「大きな病院」は「大きい病院」より出現頻度が圧倒的に高い。

(2) <部分的に見られる使い分けの基準>

- ① 抽象名詞には[オオキな][チイサな]を用いるのが普通である。例えば、「大きな影響」、「大きな原因」、「小さな旅」、「小さな事件」などの「な形」は「い形」に置き換えると不自然に感じられることが多い。
- ② 「い形」と「な形」の使い分けは「Xい」と「Xな」各々の語彙項目によって使用傾向が異なる。「オオキ」は「チイサ」と比べて相対的に「な形」との結び付きが強く、「チイサ」は「オオキ」と比べて相対的に「い形」との結び付きが強い。
- ③ 形容詞 vs.形容動詞のペア（[アタタかい・アタタカナ][コマかい・コマカナ][ヤワラかい・ヤワラカナ]）では「い形」との結びつきが強く、形容詞 vs.連体詞のペア（[オオキい・オオキな][チイサイ・チイサな][オカしい・オカシな]）では「な形」との結びつきが強い。
- ④ [オカしい]と[オカシな]は両者とも、<普通と異なる>、<その理由が分からない>、<変な>、<不可解な>という意味を持つが、<面白い><笑いそうな>を表す場合には、[オカしい]を用いる。
- ⑤ 慣用句的表現で使用する場合は決まった語形を選ぶ。例えば、「大きなお世話」は「大きいお世話」とは言えない、「小さな親切」の「小さな」は「小さい」に置き換えると不自然になる。

以上のように、「い形」と「な形」の使い分けを一つの基準で捉えることは困難であり、「い形」と「な形」の選択には実に多様な要因が混在している。そこで、本研究は以上で提示した計量的分析によって明らかになった「い形」と「な形」の使い分けの基準に基づき、名詞を修飾する「い形」と「な

形」の使い分けモデルを提案した。

「Xい」と「Xな」の使い分けモデルに示した個々の条件は絶対的なものではなく、それぞれ独立していると思われる。すなわち、「い形」が好まれる条件が文中に多ければ多いほど「い形」が使われやすく、「な形」が好まれる条件が多ければ多いほど「な形」が使われやすいと考えられる。また、「い形」と「な形」の使い分けは、何らかの条件下で「言える」・「言えない」、あるいは「い形」と「な形」の一方が「使える」・「使えない」、という問題ではなく、その条件が出現する場合に「い形」か「な形」が「好まれる」「選択されやすい」「自然と感じられる」というものである。すなわち、その条件が出現すると、「い形」か「な形」の選択が促進されると考えられる。

本論文における計量的記述の成果は、提案した「い形」と「な形」の使い分けモデルにまとめられている。このモデルによって、曖昧であった「Xい」と「Xな」の使い分けの有様がより明示的になったと言える。

「い形」と「な形」の使い分けは内省による一般化が難しい。本研究の方法論的示唆は、大規模コーパスより得られたデータを計量的分析・記述することによって、このような内省の一般化が難しい言語の特徴を明らかにできるという事実である。本研究では多様なコーパスを利用した。また、扱った用例は14,188例にのぼる。9種類のコーパスと14,188の例文に基づいた記述は内省や偏りのあるコーパスのみに基づいた議論に比べて、信頼性がより高いと考えられる。また、本研究の記述は、大規模で多種類のコーパスから得た用例を、被修飾名詞の性質や対象語句の文中での機能をデータベースに整理するという方法に基づいて徹底的に質的分析を行うことと、コーパス間の比較分析によって可能になったものである。どの分析も、コーパスの存在なくしては実践が困難なものである。こうした方法を採用することによって、従来の研究では達することの難しい新しい研究領域が開けていくと考えられる。